

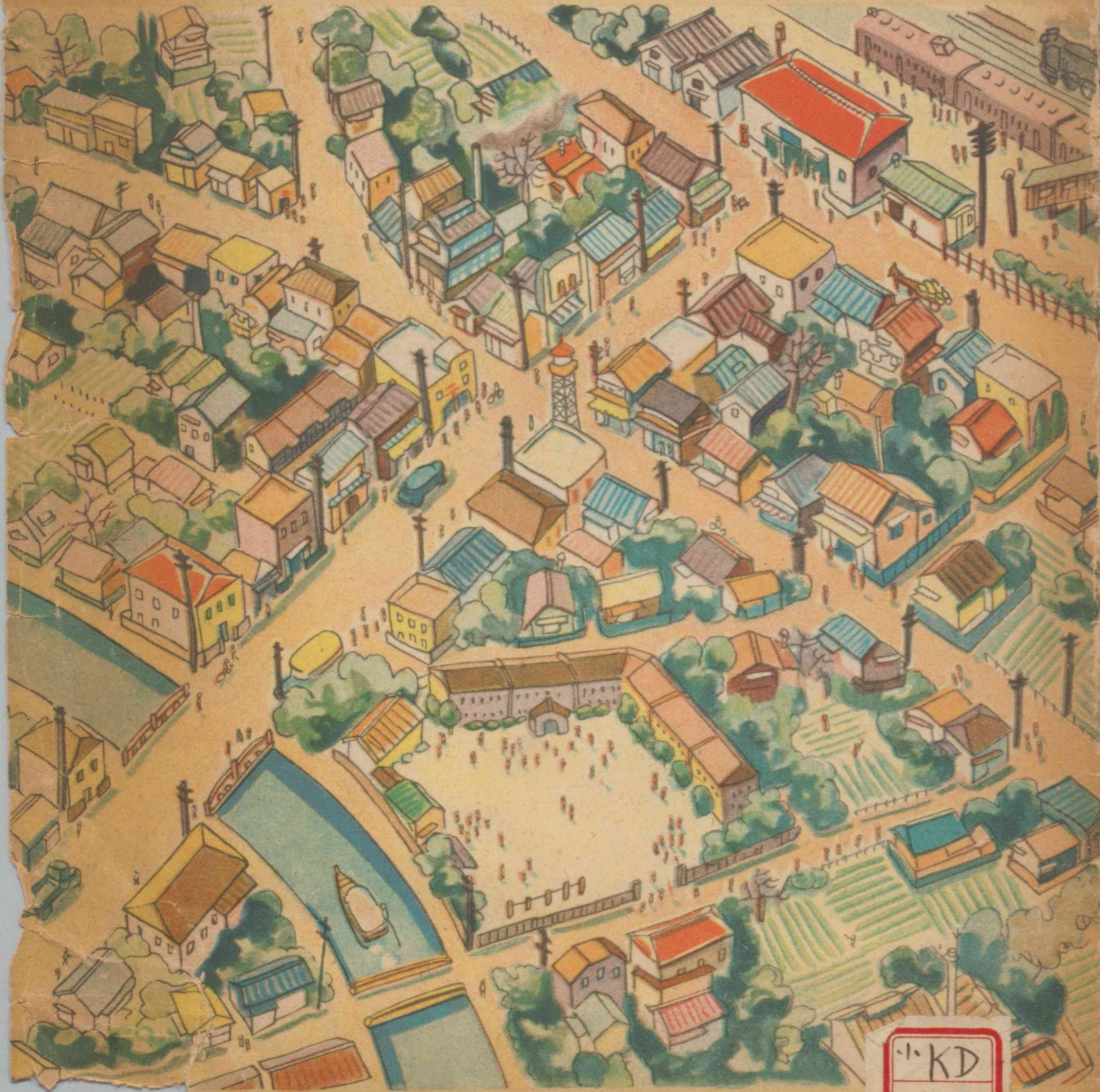
部省検定済教科書
教育図書研究会編修

小社204
学図

社会科 二年

教育學部
資料室

みのにるさん



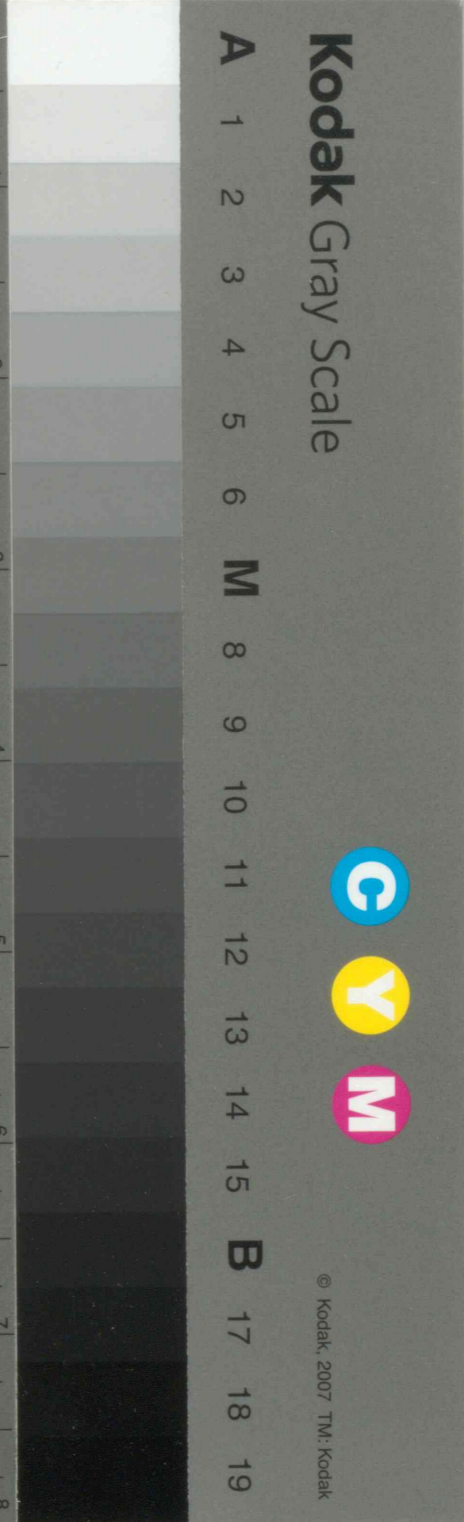
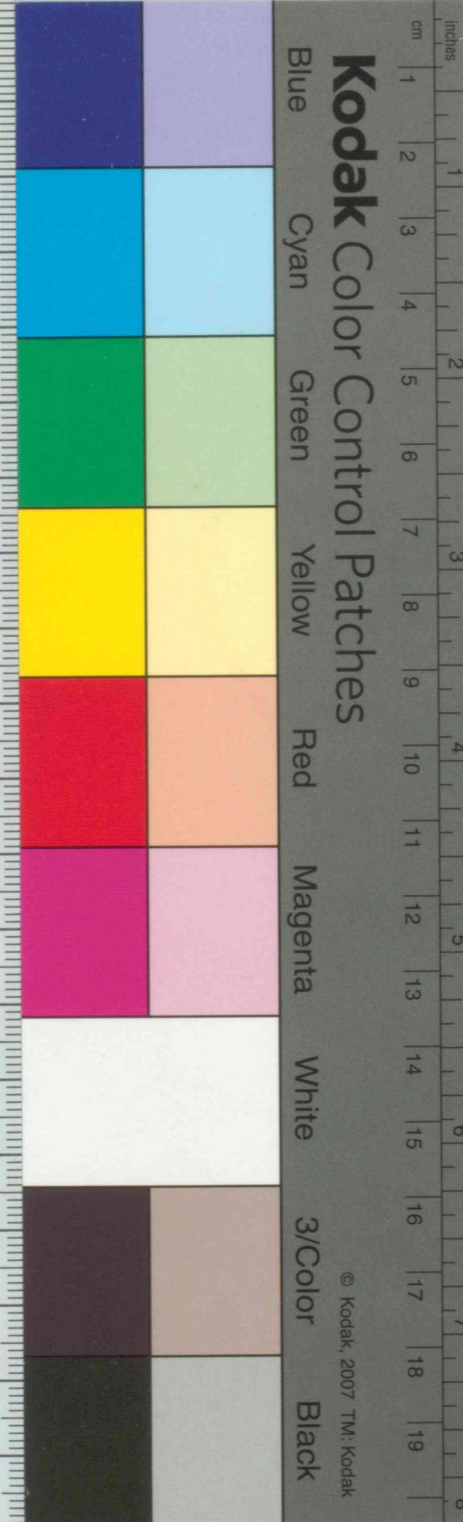
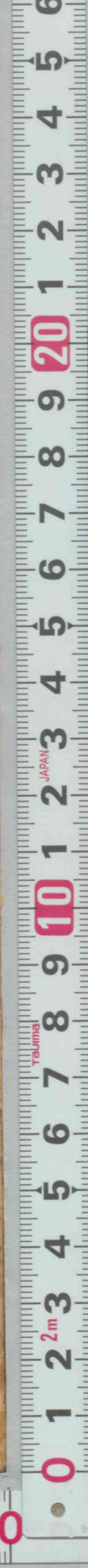
KD
516

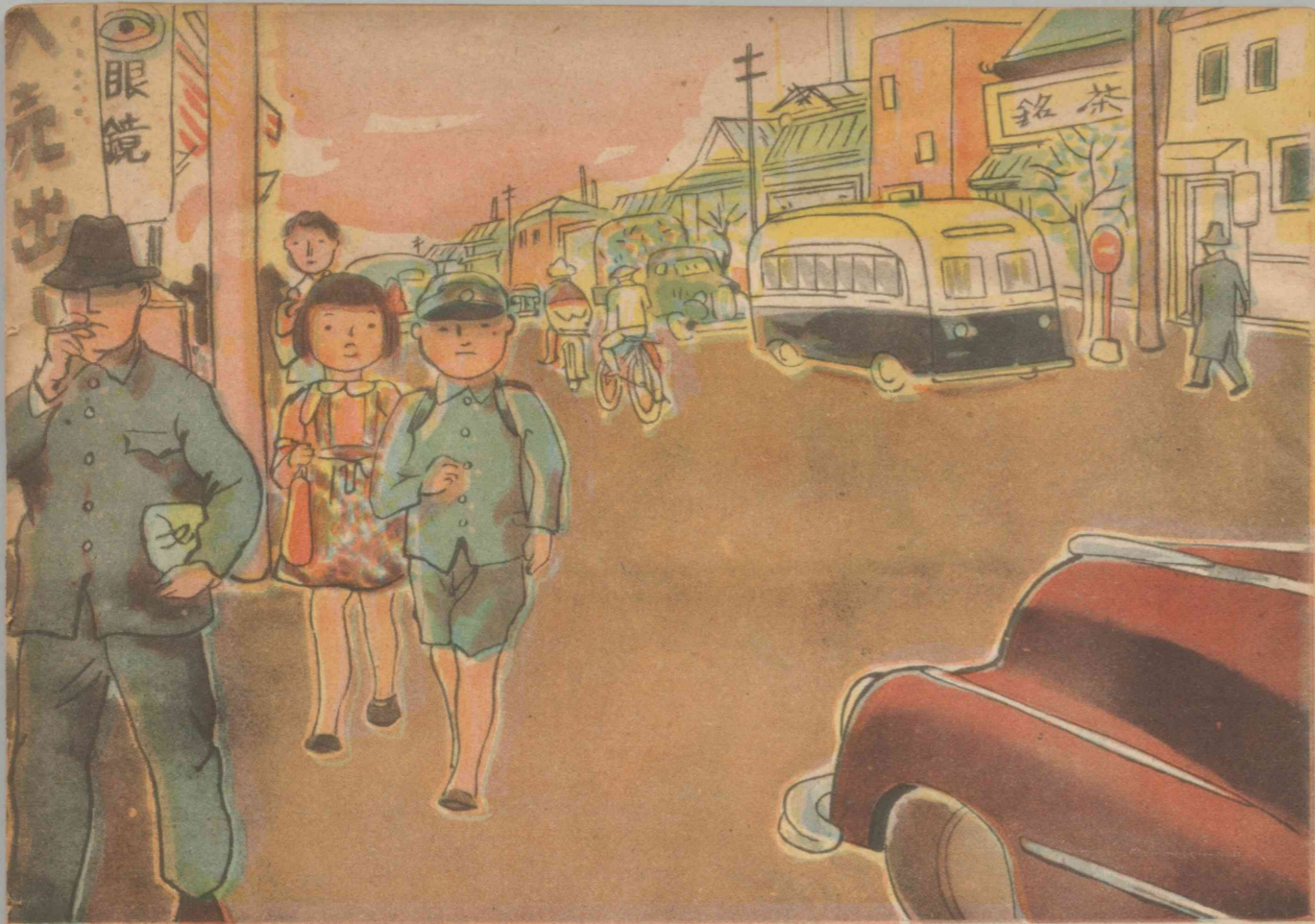
学校図書株式会社

60031

教科書文庫

6
300
34-1950
0134
49974





中央図書館

昭和25年月日 文部省検定済
小学校社会科用

寄



みのるさんの おとうさん。
ひりょうこうばの しょくこうちょうで、
まいにち こうばへ かよって います。
みのるさん。
四月に 二年せいに
なりました。
さちこさん。
みのるさんの いも
うとで、ようちえん
に、かよっています。
みのるさんの おかあさん。
うちに いて、みんなの せわを して
います。

もくじ

一、こうばん	1
二、おてつだい	6
三、てがみ	10
四、ゆうごはん	16
五、しょうぼうしょ	23
六、いなかへ	27

一 こうばんへ

きょうも みのるさんは、となりの よし
こさんを さそって、がっこうへ いきます。
よしこさんは、一年せいです。
あさの おもてどおりは、にぎやかです。
がっこうへ いく こども、つとめに
でる おとな。
みんな、みぎがわを とおって いきます。
じてんしゃが とおります。
やさいを 山のように つんだ トラック
が とおります。

広島大学図書

0130449974





にばしゃも ガラガラ、とおって いき
ます。

おみせでは、うちみずを したり、かざ
りまどの ガラスを みがいたり して
います。

ふたりが ゆうびんきよくの ちかくに
きた ときでした。

「おや。」

と、みのるさんは くさかげの ほうへ
よって いきました。

そこに なにか おちて いたからです。
ひろって 見たら、まんねんひつでした。

「みのるさん、どうするの。」

「こうばんへ とどけよう。」

「こうばんへ。」

「おまわりさんは、おとしものの せわも
して くださるんだよ。」

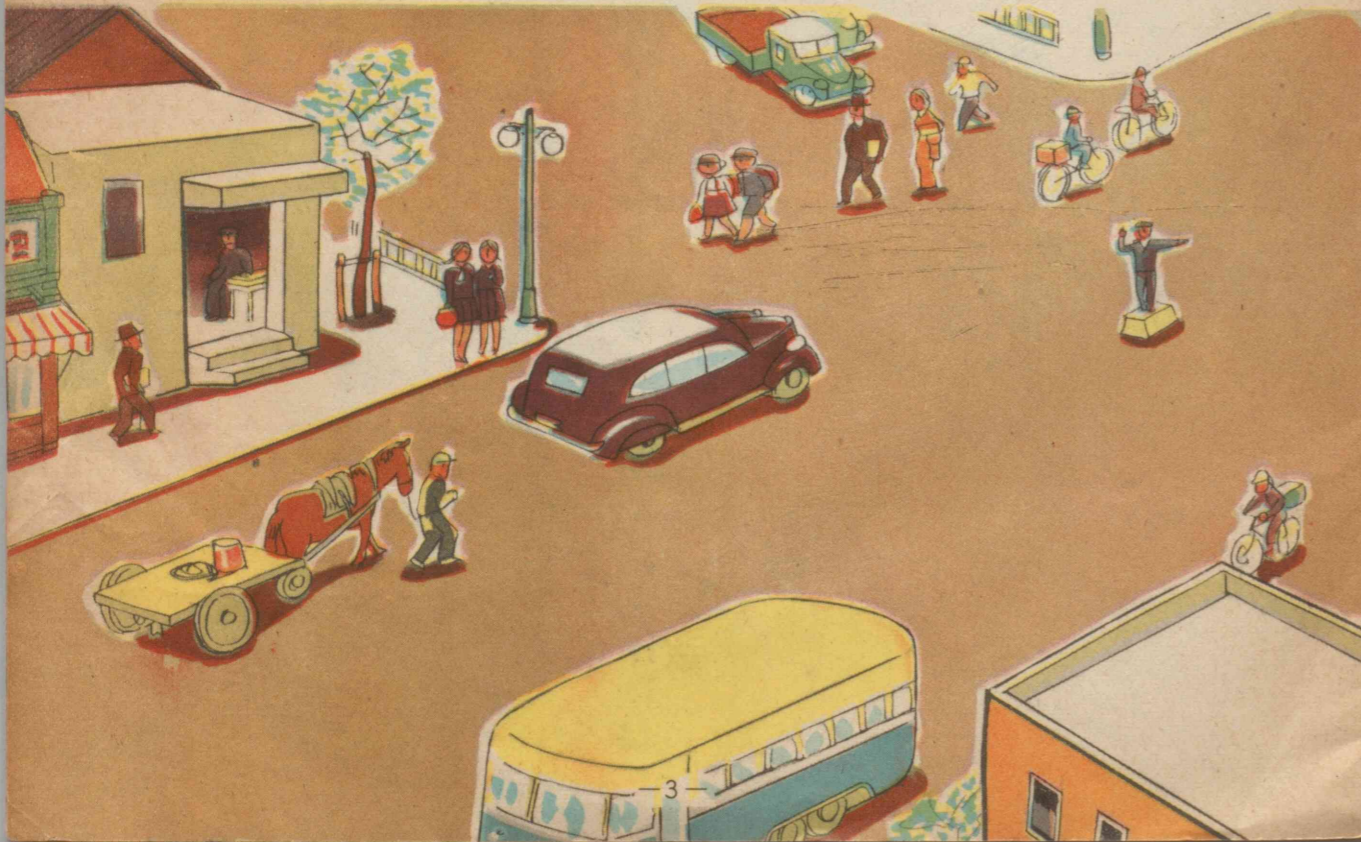
「そうなの。」

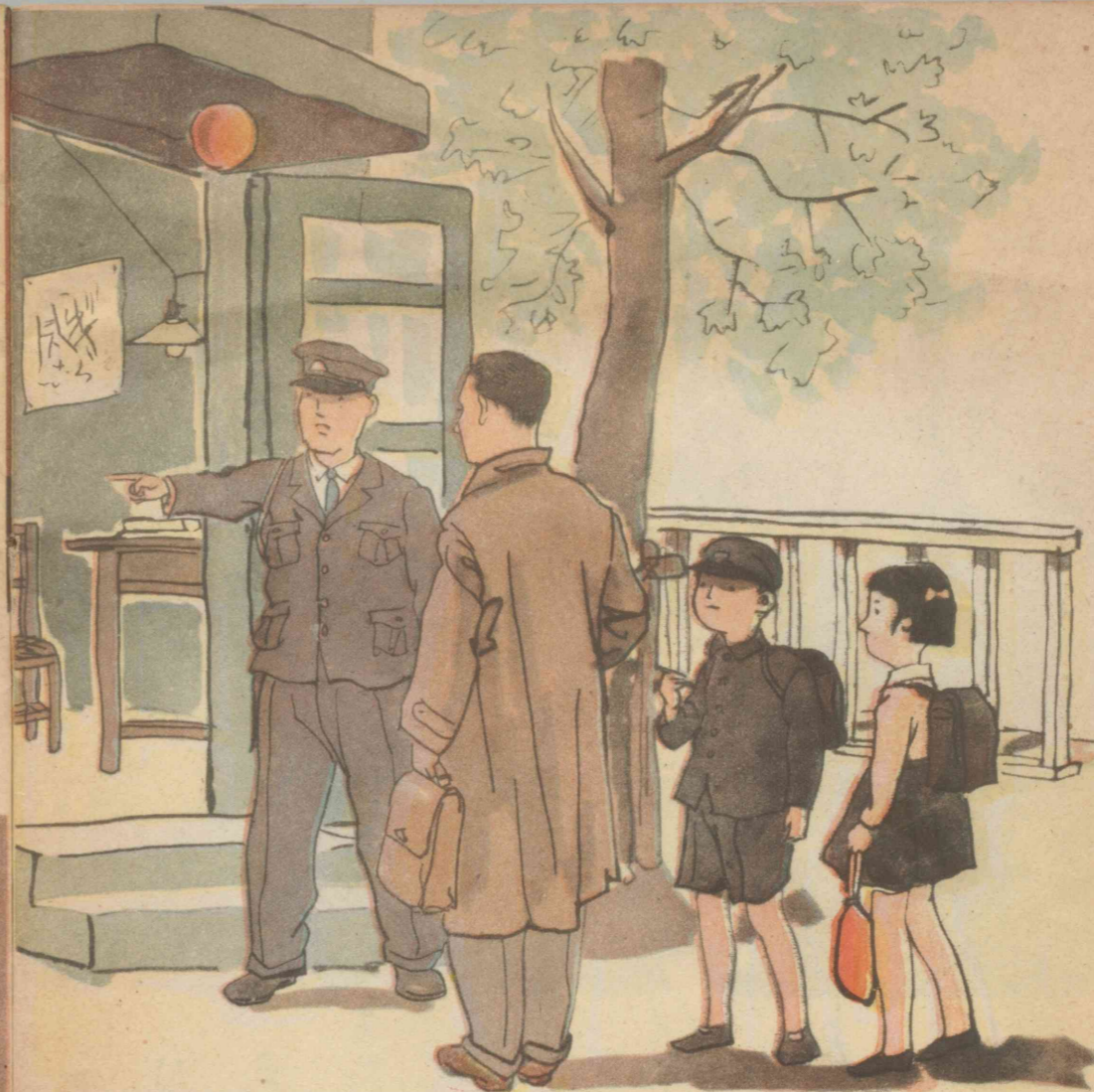
すこし とおまわりに なりますが、

ふたりは 四つかどの こうばんへ いきました。

ここは 町でも 人どおりの おおい
ところですよ。

こうつうせいの おまわりさんの あいずで、
おうだんほどうを わたりました。





こうばんの いりくちに かばんを さげた おじさんが います。
 おまわりさんは、おじさんの たずねる いえを せんせつに おしえて いました。

「おまわりさん、まんねんひつが おちて いましたよ。」

「まんねんひつが——どなた。」

「ゆうびんきょくの ちかいです。」

「そう。よく とどけて くれました。」

「きみの なまえは。」

「木山みのる。」

「なん年せいなの。」

「二年せいです。」

「じゅうしよは。」

「中町 ニちようめ 三十ばんち。
 「はあ、では ひりようこうば
 へ いったい いる 木山さんの
 うちだね。」
 「そうです。」
 みのるさんは「おまわりさんは、
 どうして おとうさんを じつて
 いるのだらう。」と おもいました。
 「さようなら。」
 「ごくろうさん。」



ふたりは がっこうへ いそぎました。
 みのるさんは、がっこうで けさの できごとを ともだちに はなしました。

二 おてつだい

「ただいま。」

「おかえりなさい。」

「おかあさんは、ミシンで シャツを ぬって
います。さちこちゃんは つみ木を して います。」

「これ、だれの シャツなの。」

「もう すぐ 春の うんどうかいでしょう。」

「みのあるさんの うんどうぎですよ。」

「うれしいな——おかあさん、ぼく、けさ

まんねんひつを ひろいましたよ。」

「そう。それで どうしたの。」

「こうばんへ とどけました。そしたらね、

おまわりさんが うちの おとうさんを

しって いましたよ。」

「そうですか。こうばんでは、どこに だれが

すんで いるか、よく しって いるのよ。」

よしこさんの おかあさんが ききました。

ちかくの しんせきに あかちゃんが うまれた

ので、おいわいに いかれる ところ です。おばさんが、

「みのあるさん、よしこが るすばんを して いるんですけど、うちで いっしょに あ

そんで くださらない。」

「はい。おかあさん、いって きますよ。」





と、いって だいの 上に あがった
すばやく かみに かきとりました。

「さようなら。」
おじさんは、みのあるさんの うちの ほうへ いきました。
「おみせごっこを しましよ。」
と、よしこさんが いいました。
「うん、しよ。 なんの おみせが いいかな。」
「ぶんぼうぐやさんは どう。」
「さんせい。」
よしこさんは、えんぴつや クレヨンや
けしゴムなどを そろえました。
みのあるさんは、ぶんぼうぐの ねだんを
小さな かみに かきました。
しばらく あそんで いると、おばさんが かえって きました。

みのあるさんは となりへ いきました。
ふたりが ざっしを みて いると、
でんとうかいしゃの 人が メートルを
しらべに きました。
よしこさんが ふみだいを もって きますと、
「どうも ありがとう。」
おじさんは、メートルの すうじを しながら、



どようびの ごごでした。

みのるさんは さちこちゃんと うさぎの

くさを とりに いきました。

「うさちゃんは、これ だいすきよ。」

と、さちこちゃんが おおばこを とって います。

「さっちゃんは よく して いるね。きょうは、

うさちゃんに ごちそうを して あげようよ。」

ふたりは おおばこの はも つんで かえりました。

ぴよんぴよん はねて よろこぶ うさぎに、

はっぱを たべさせて いますと、



「みのるさん、てがみが きて いますよ。」

と、おかあさんが おっしゃったので、いそいで

うちへ はいりました。

「だれからなの、おかあさん。」

「中村と かいて あるんだけど だれ

でしょうね。あけて ごらんさい。」

あけて みると、みのるさんに よ

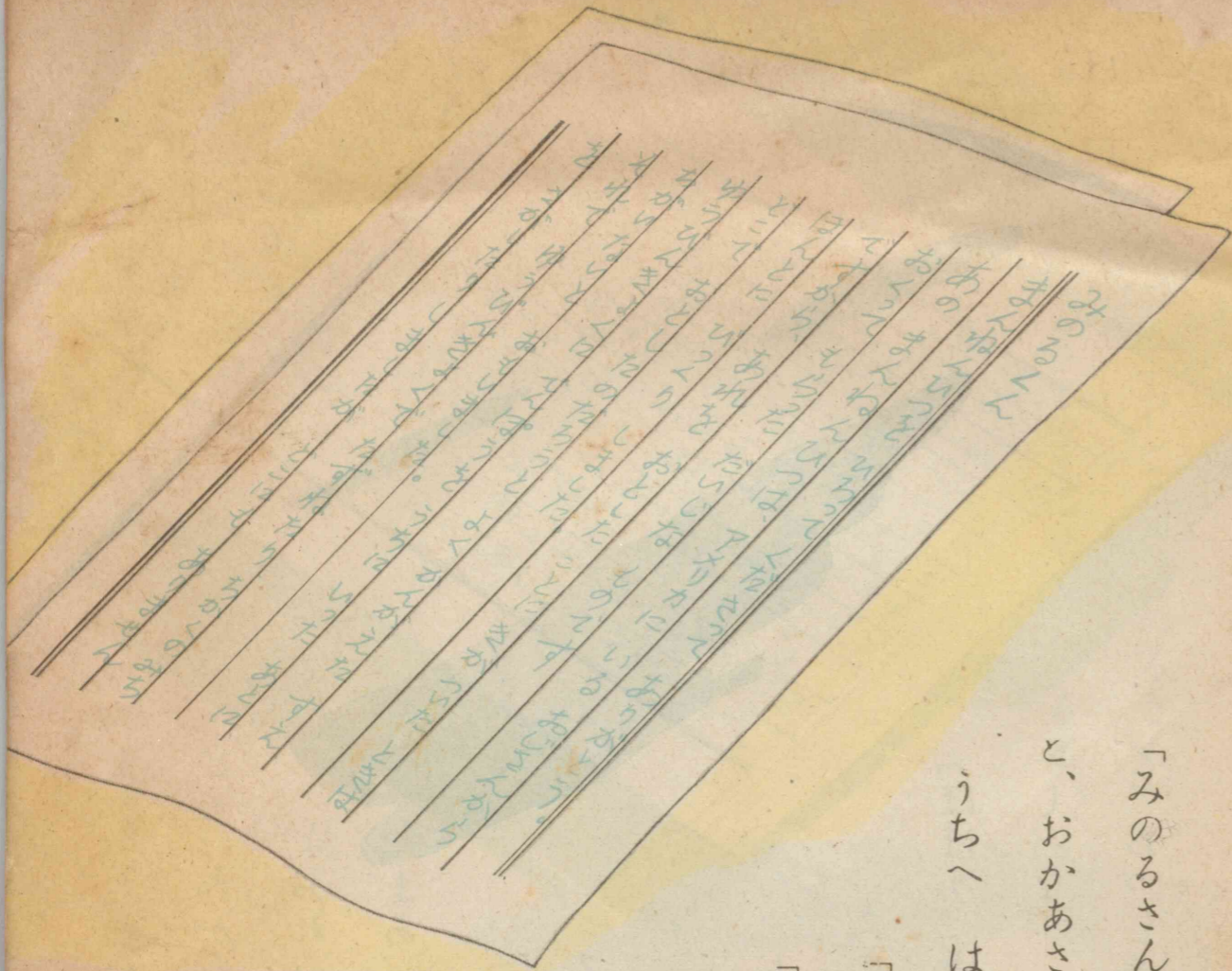
めるように、かいて ありました。

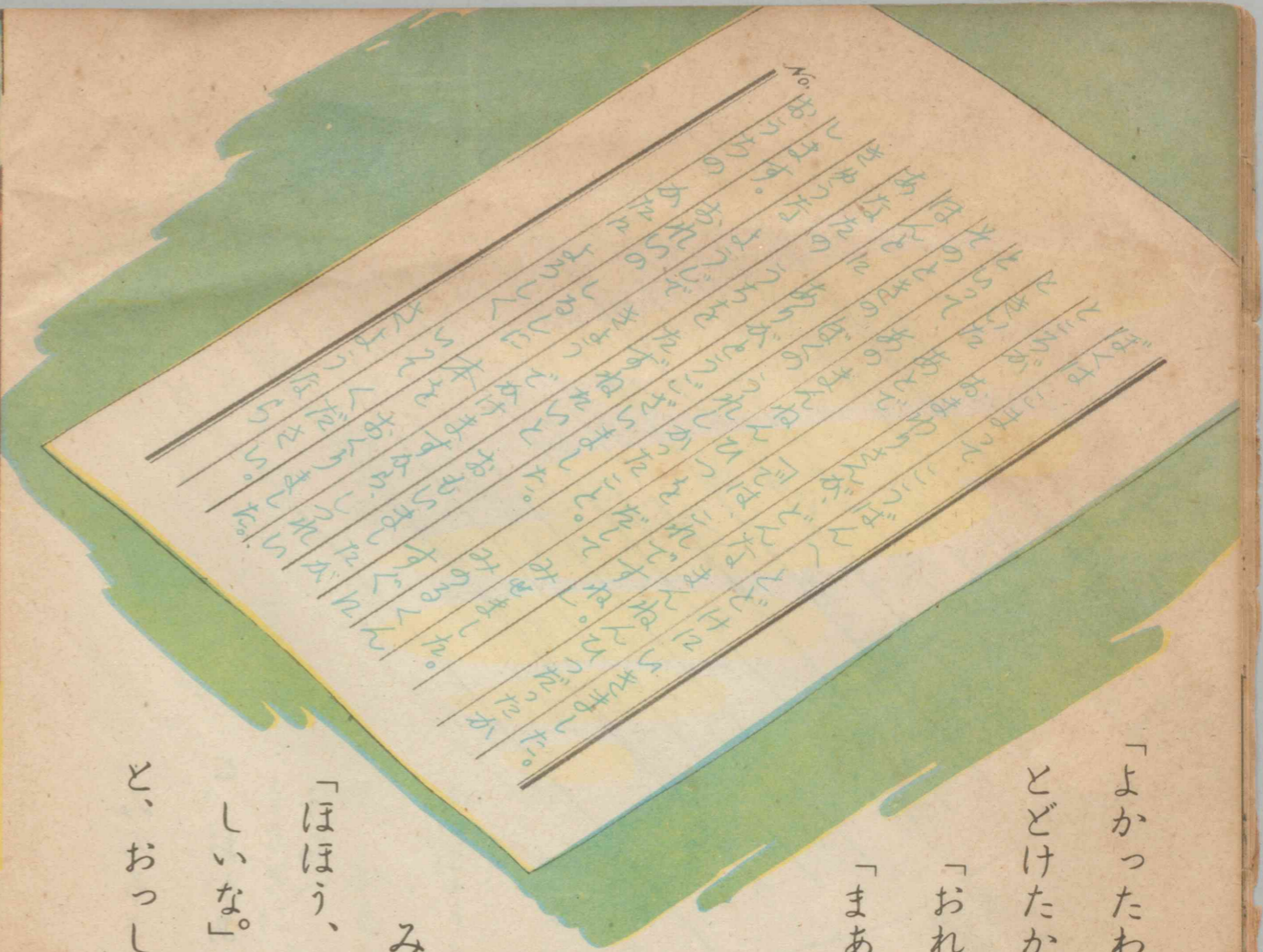
「おかあさん、この 人 まんねんひつ

を おとした 人ですよ。アメリカに

いる おじさんから もらった だい

じな ものだったんですって。」





「よかったわね。これも みのるさんが こうばんへ
とどけたから、中村さんに とどいたのよ。」

「おれいに 本を おくりますって。」

「まあ、どんな 本でしょうね。」

みのるさんは いくども その てが

みを よみました。

ゆうがた おとうさんが こうばかり

おかえりに なりました。

みのるさんが その てがみを みせると

「ほほう、中村さんは ずいぶん うれしかったら

しいな。」

と、おっしゃいました。

あくる日の 十じごろ みのるさんが

さちこちゃんを あそばせて いると、

ゆうびんやさんが きました。

「木山さん こづつみですよ。」

みのるさんが とんで、いくと、

「みのるくんこづつみ。はい。」

「どうも ありがとう。」

「いいものが はいって いるようだね。」

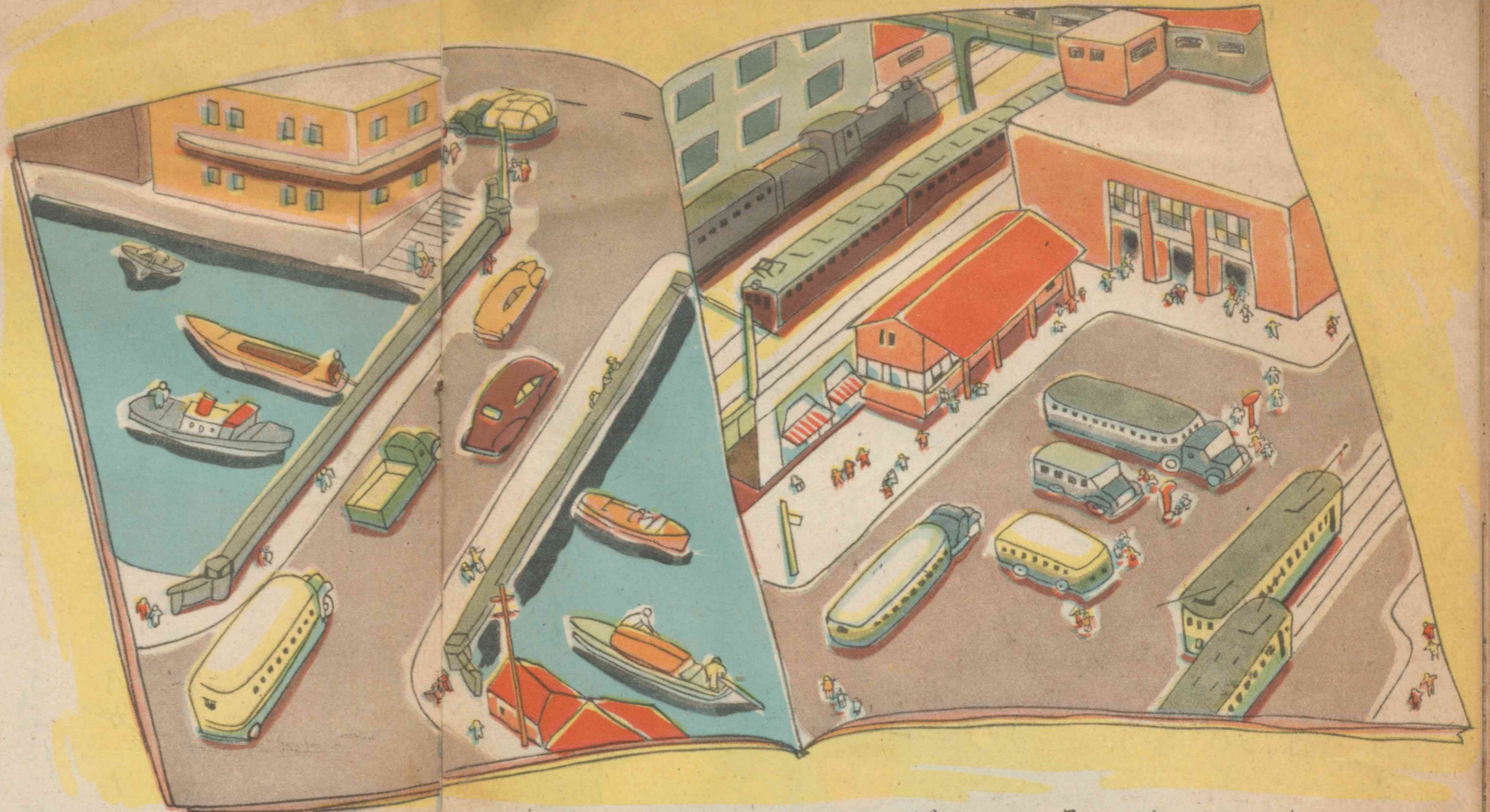
ゆうびんさんは、そーいって でて

いきました。みのるさんが つつみを ひらくと、

イソップの本が でて きました。

「からだを じょうぶに」という 本が でて きました。





みのもるさんが、

「おねがいします。」

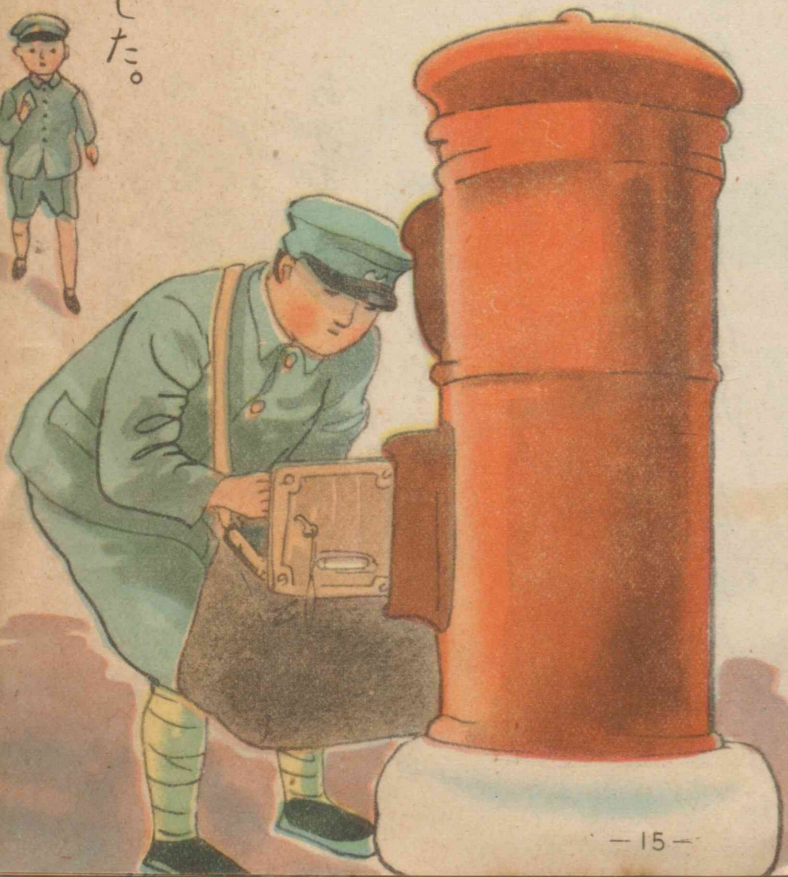
と いった、てがみを さしだと、

「はいはい。ちょうど よかったね。この

あとに いたら、あすの あさに

なるんだった。」

と いいながら、てがみを かばんに 入れました。



のりもの えほんも でて きま
した。さちこちゃんが、

「これ、みせてね。」

と いった、のりもの えほんを
みて います。

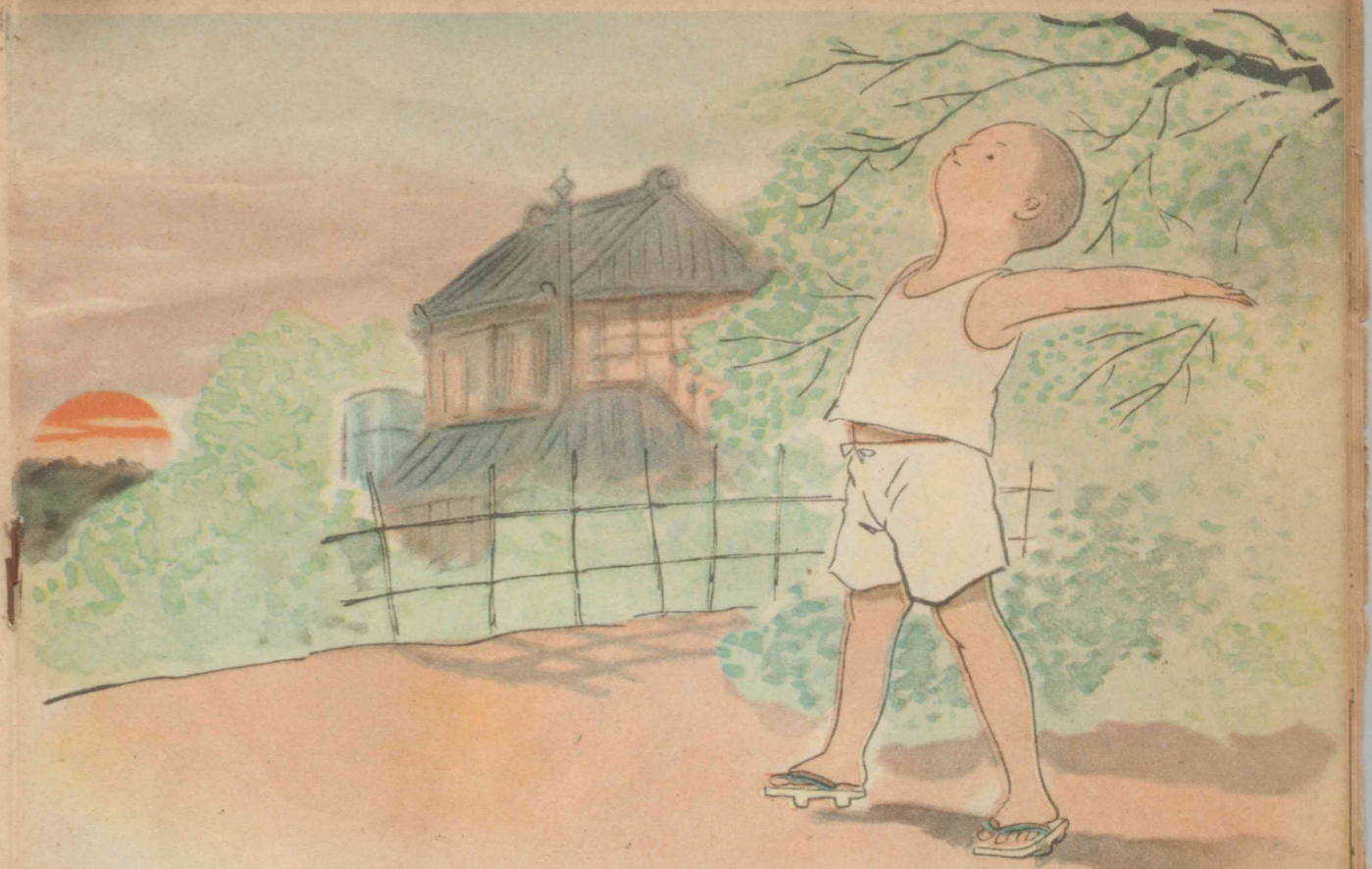
せんたくを おわった おかあさん
が はいって きて、

「まあ、いい 本だこと。みのもるさん、
よしこさんにも みせて あげたら。」
と、おっしゃいました。

みのもるさんは、すぐに 中村さんに
おれいの てがみを かきました。

おかあさんに みて いただいてか
ら、きつてを はって、ポストに
いれに いきました。

ポストの そばに ゆうびんやさん
が いました。



四 ゆうごはん

つゆが あけました。

このごろ みのるさんは、まいあさ はを
 みがいた あとで、しんこきゆうを します。
 中村さんから いただいた「からだを じよ
 うぶに」という 本の なかに、しんこきゆ
 うが たいへん からだに よいと かい
 あったからです。
 むねいつぱいに あさの きれいな くうき
 を すうと、ほんとに いい きもちです。

にっちゆうは ずいぶん あつく なって
 きましたが、みのるさんは げんきです。
 ゆうがたに になると あさがおに 水を やります。
 にわに 水を まきます。みのるさんが、
 「おかあさん、おにわで ごはんを たべたら
 すすしくて いいでしょうね。」
 「それは いい おもいつきね。そう しましょう。
 うちじゆうを さがして、テーブルに なる
 ものを あつめました。いすが たりないので
 みかんばこを もって きたり しました。
 さちこちゃんも うれしそうに ちゃわんや
 さらを はこびます。



すっかり したくが できた とき、
おとうさんが かえって いらっしやいました。

「おとうさん、おかえりなさい。」

「えらい げんきだね。みのる。」

おとうさんは ふくを きかえながら、

にわを みて、

「おう、これは すばらしい。すてき すてき。」

手を たたいて よろこびました。

みのるさんは、うれしくて たまりません。

「さあ いただこう。」

「いただきます。」

「すずしいね。」

「いい ところに きが ついたものだ。」

さちこちゃんが

「あたしも ここで たべようね。」

と いいます。みんな さんせいです。

かぜが みのるさんの つくった

ふうりんを ならします。

「ああ、おいしかった。」

「ごちそうさま。」

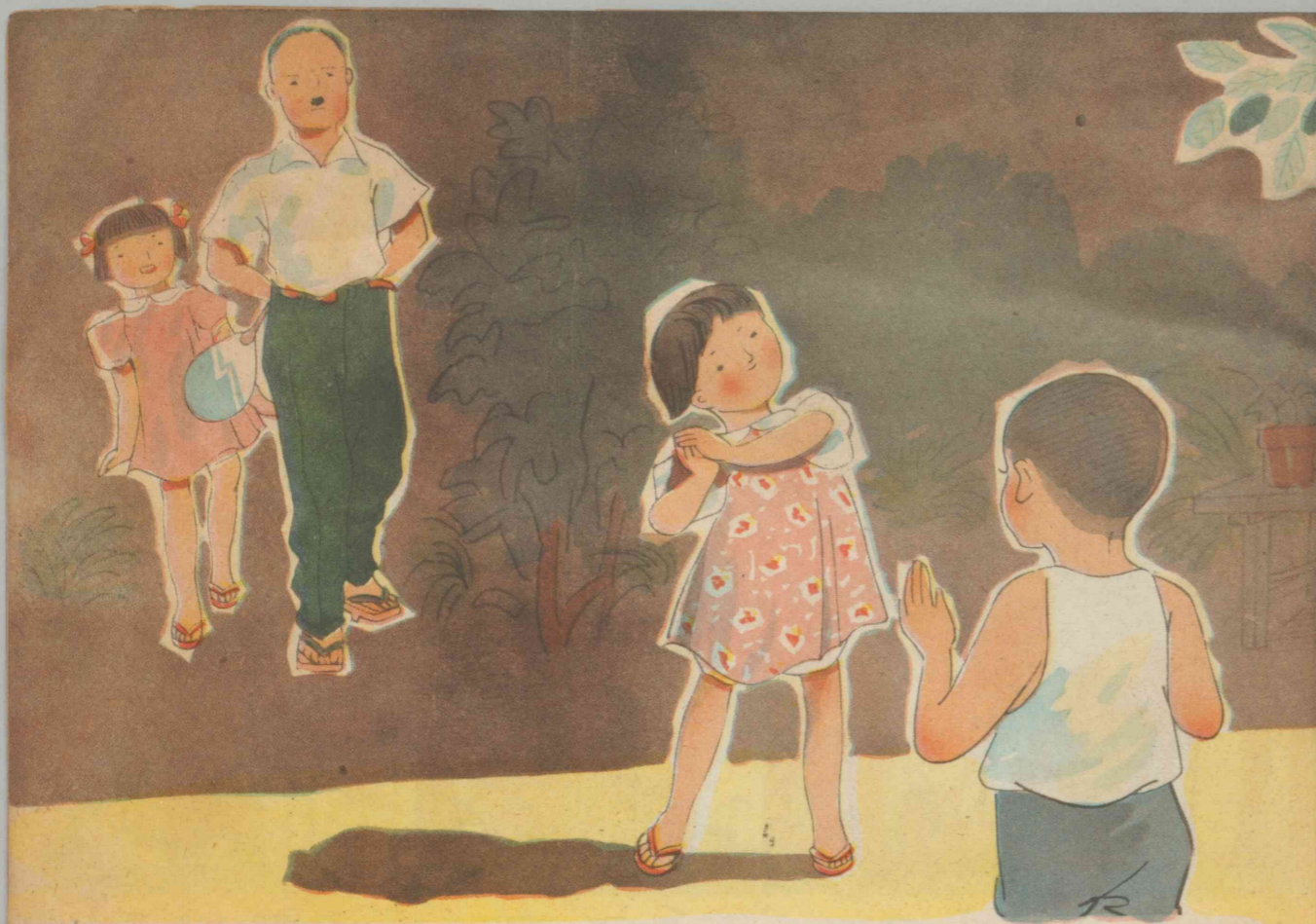
おとうさんが、

「みんなでおかあさんの てつだいだ。」

と 言って、ちやわんを はこびます。

さちこちゃんは さらに はこびます。





みのもるさんは、テーブルの上をきれいにふきます。

そのあとで、みのもるさんはこのあいだからよんでいたイソップのはなしをしました。

よくばってしっぱいをしたいぬのおはなしです。

ラジオのスイッチをいれると、

「ゆうやけこやけで日がくれて。」

と、かわいいうたがきこえてきました。

さちこちゃんがうたにあわせておどります。

おとうさんも おかあさんも みのもるさんも
ラジオにあわせてうたいます。

「やあ おたのしみですね。」

ふりかえってみると、よしこさんのおとうさんがきていました。

よしこさんもそばにたっぺいます。

「さあ、どうぞ。」

おかあさんはいすをすすめました。

よしこさんは、さちこちゃんとかけました。

よしこさんのおとうさんは、しょうぼう

しよにおつとめです。みのもるさんが、



「おじさん、このごろは かがが ありませんね。」

「町の 人たちが 火の ようじんを よく して くれるからだね。」

「おじさん、なにが もとで かがに なるの。」

「そうだね。しょうぼうしよに よい ポスタ

トが あるよ。あした がっこうが ひけて

から きて ごらん。みせて あげるから。」

「うれしいな。よしこさん、いっしょに いこ

うね。」

「ええ。」

おじさんは まもなく かえりました。

五 しょうぼうしよ

よしこさんが さそいに きました。

「おかあさん、しょうぼうしよに いって

きますよ。」

と、みのるさんが いうと、おかあさんが

「いっていらっしやい。かえりに さちこ

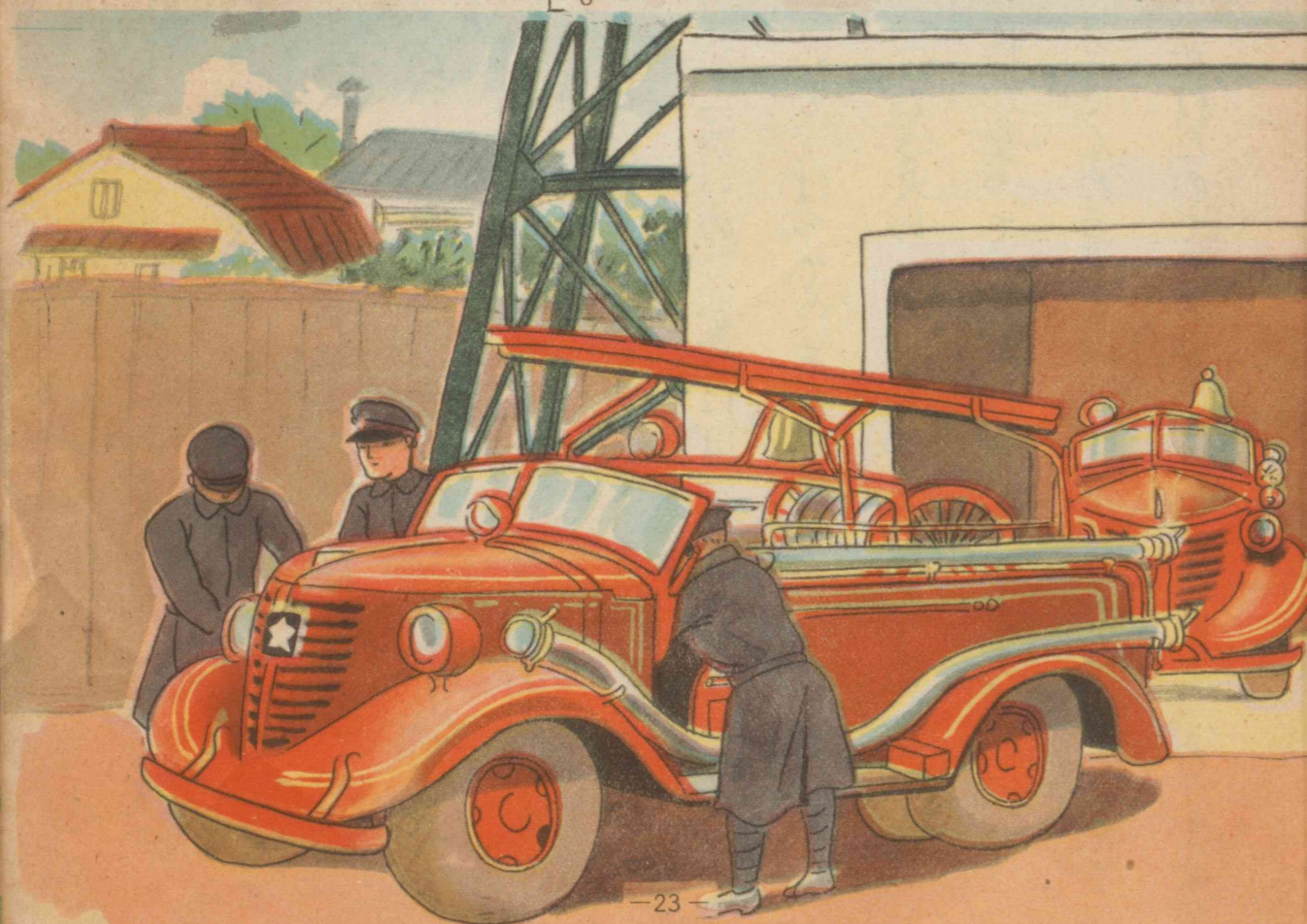
ちゃんの はブラシを かって きてね。」

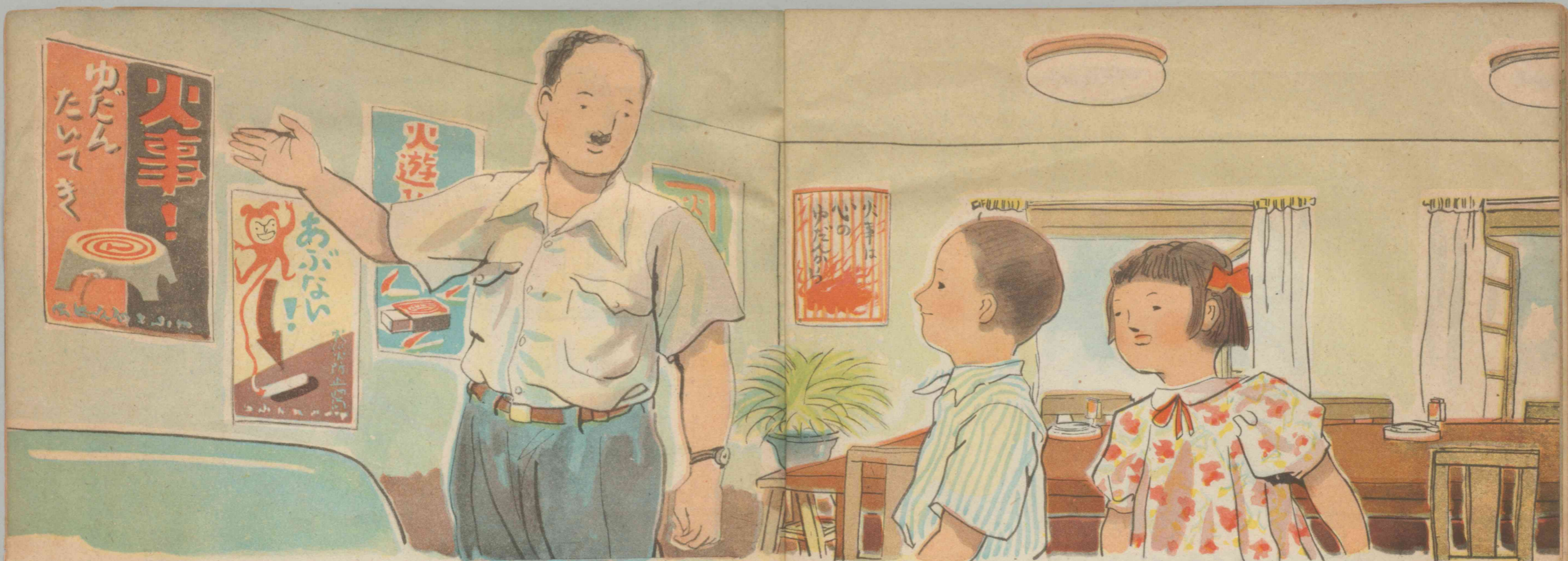
と いって、おかねを くださいました。

しょうぼうしよは 四つかどの こうば

んの すじむかいに あります。

たかい ぼうろうの 上で みはりを





して いる 人が います。
 しょうぼうじどうしゃが 二だい、
 「いつでも すぐに かけだせるぞ。」
 と、いうように ならんで います。

おじさんが すぐに みのるさんたちを
 みつけて あんないして くれました。

二かいの かべには ポスターが なんま
 いも はって あります。

たき火の あとしまつが わるくて かじ
 になって いるのが あります。

でんねつきを かけっぱなしに して
 かけたので かじに なったのも あります。

たばこの すいがらや、こどもの 火あそ
 びが もとで、かじに なって いるのも
 あります。おじさんは、

「こどもは、火あそびを しない ことだ。
 三がいへ あがって みよう。」

と、おっしゃったので、ついて いきました。
 がっこうが みえます。えきが みえます。

みのるさんの うちも みえます。
 おじさんが いそがしそうなので、

「どうも ありがとう。」

と みのるさんは、おれいを 言って、よし
 こさんと しょうぼうしよを でした。

四つかどの ちかくには、ごふくや、かなものや、くつや、おかしや、くだものや、にくや、かんぶつやなどが ならんで います。

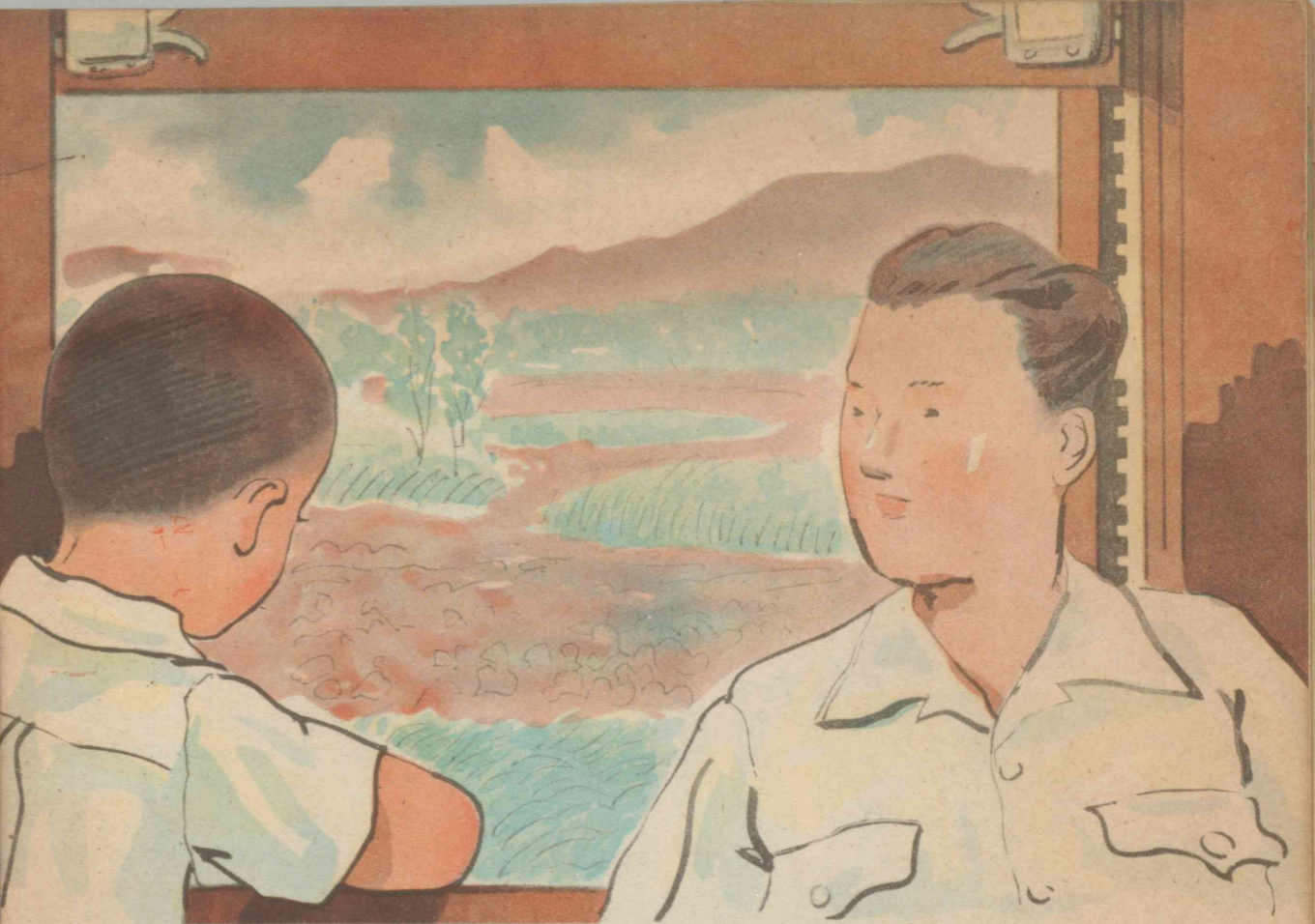


みのるさんは、くすりやへ はいりました。
「はブラシを ください。」
「はい。あなたのですか。」
「いいえ、六つのおんなの このです。」
おばさんが いくつか だした なかから、
みのるさんは、あかい えの ついた、けの
たいらで ないのを えらびました。ねだん
を きくと、二十五えんなので 三十えん
だして、五えん おつりを もらって かえ
りました。

六 いなかへ

みのるさんが たのしみに まって いた
日が きました。おとうさんと いっしょに
いなかの おじさんの うちへ いく 日です。
おじさんの うちで だんしゃで いくと、
一じかんはんぐらいで つきます。
ふたりは うちを でした。
えきの ホームに はいると、えきいんが
手おしポンプで 水を まいて います。
はしらには ゆりの 花を さした かびん
が かけて あります。





「この えきは いつ きても きれいで
きもちが いい。」

と、おとうさんが おっしゃいます。

まもなく でんしゃに のりこみました。

町を ではずれると おかつづきの はた

けに さつまいもや おかぼが みえます。

とちゅうの えきに かもつでんしゃが

とまって いました。

「おとうさん、あの かもつも おじさんの

村の ほうへ いくんですね。」

「そうだよ。こうばで つくった ひりょう

が つみこんで あるかも しれない。」

「かえりには、なにを つんで くるの。」

「そうだね。じゃがいもが すんで、このご

ろは むぎかな。ざいもくも おおいね。」

いつのまにか おかが なくなって、でん

しゃは たんぼの 中を はしって います。

みるるさんは かぜで なみを たてて

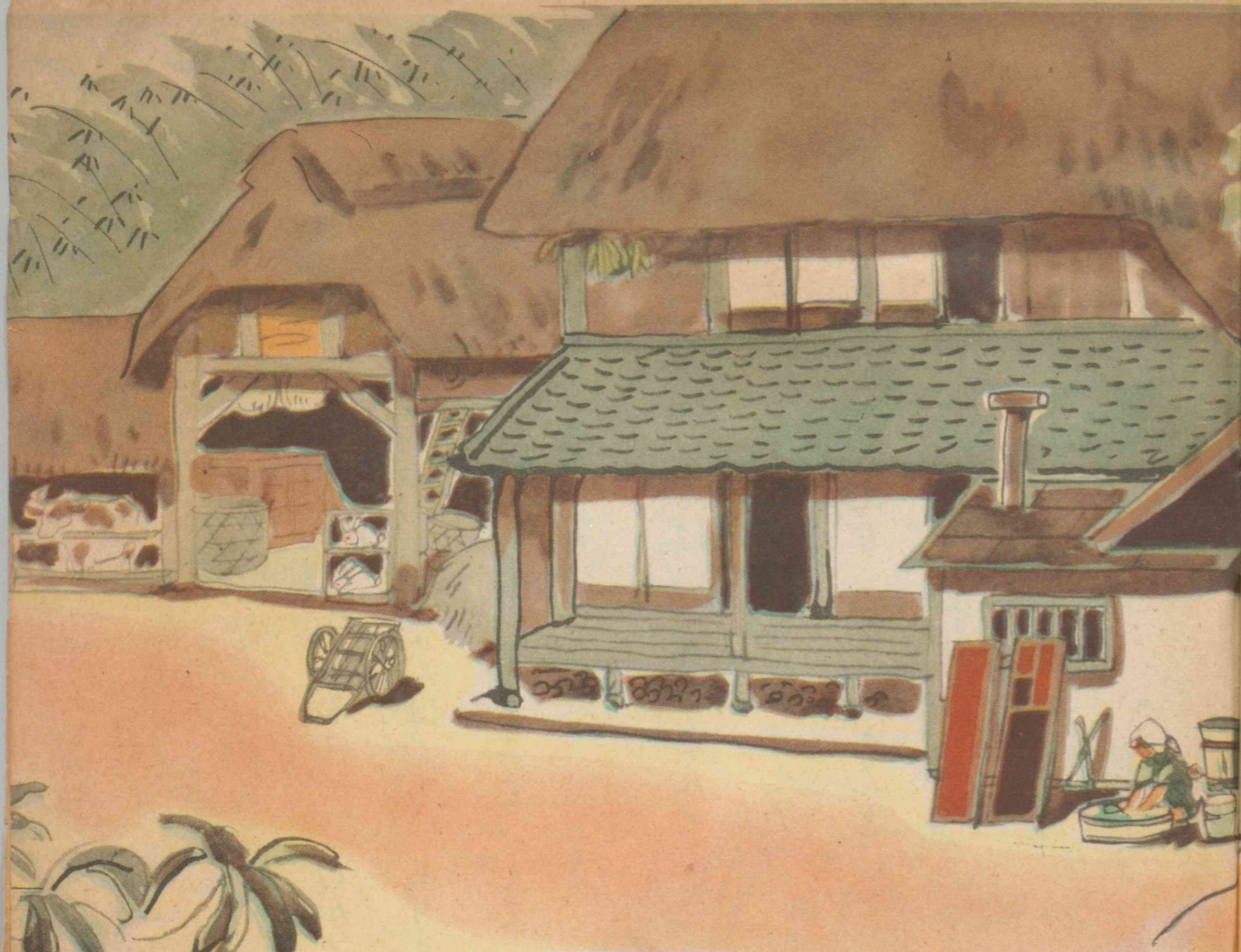
いる いねを みて、

「あの かもつでんしゃも あきになると

おこめを つんで 町へくるんだな。」

と、おもいました。

おじさんの 村の えきで おりました。



「村のくみあいで あつめて 町の
いちばへ おくるのよ。」
みのるさんは、やおやで うって
いる たまごも こうして くるのだ
など おもいました。



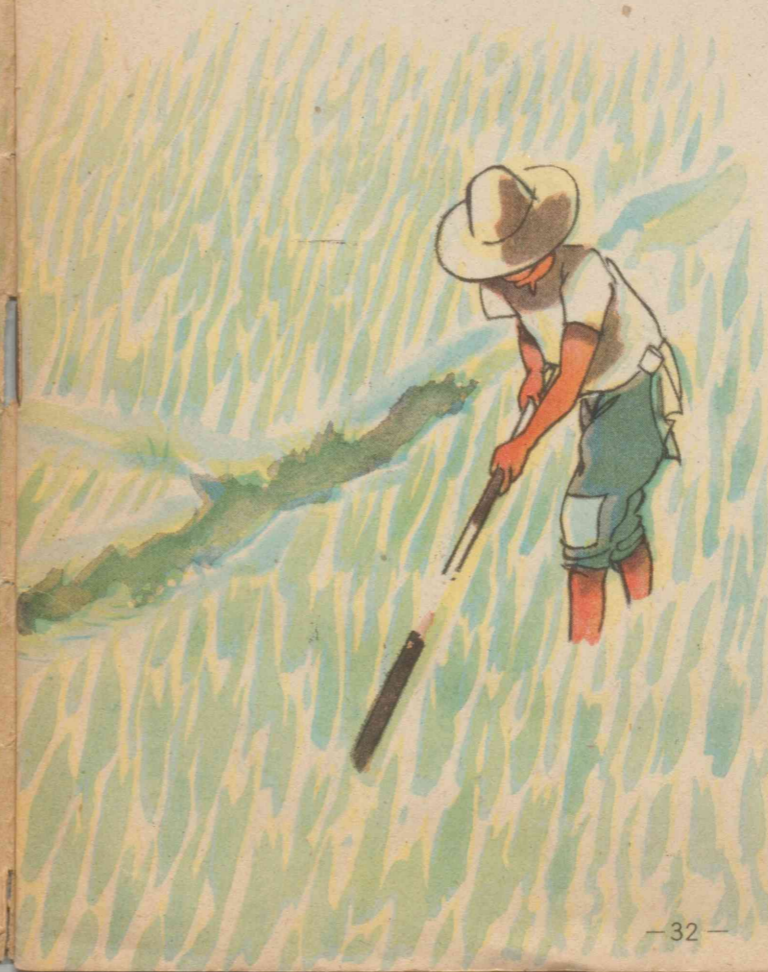
「どのれ、手つだつて こよう。」
と、おとうさんが たんぼへ でかけ
たので、みのるさんは ゆりこさんと
にわへ できました。
うしごやが あります。にわとりご
「みのるさんと おじさんよ。」
と いったので、おるすばんの おば
あさんが でて いらっしゃいました。
みのるさんは おばあさんに あい
さつを しました。

おじさんの うちに つきました。
にわとりに えさを やつて いた いとこの ゆりこさんが、



やぎも いました。まいにち ちちを しぼって みんなで のんで いるそうです。
 どぞうの ちかくには うめや びわや かきの木が
 なんぼんも あります。町と ちがって いえも にわも
 ひろびろと して います。

あくる日、みのるさんは ゆりこさんと
 たんぼへ おちやをもって いきました。
 おじさんもおばさんもおとうさんも
 田の くさを とって います。
 かんかんと てりつける お日さまに
 たんぼの 水が あつくなくて いるので、



たいへんな しごとだと おもいました。

ゆうがた はやめに ごはんを いただいて かえりました。

うちに つくと、さちこちゃん が どんできました。おみやげの

トマトと たまごを みて おおよろこびです。

みのるさんは、あくる日 となりへ いった よしこさんに たまごを わけて あげました。

みのるさんは、いなかで みて きた ことを えにかいて、がっこうへ もって いくと、おもっています。





広島大学図書
0130449974

Approved by Ministry of Education (Date 1950)

編者 東京都文京区大塚窪町24 東京高等師範学校附属小学校内
財団法人 教育図書研究会
理事長 東京高等師範学校教授 佐藤保太郎
執筆担当者 東京高等師範学校教諭 篠原重方 樋口行忠 石井五
本書の指導書・ワークブック・
注釈書並びに、これに類する
ものの無断発行を禁ずる。
表紙及きしえ新

昭和25年月日印刷 昭和25年月日発行
著者 東京都文京区大塚窪町24 教育図書研究会
会 長 務 台 理 作
発行者 東京都港区芝三田豊岡町8 学校図書株式会社
代表者 川口芳太郎
印刷者 東京都港区芝三田豊岡町8 図書印刷株式会社
代表者 川口芳太郎
発行所 東京都港区芝三田豊岡町8 学校図書株式会

教師及び保護者の方へ

本書は、社会科指導要領、同補説及び検定基準の趣旨にそい、第二学年の目標とするところを十分に留意し、努力することにより、三十二頁という限られた紙数のものであるから、指導者は、つぎの諸項をよく理解して、本書を有効に使用していただきたいのです。

- 一、都会であると農村であるとを問わず、児童が家庭及び身近社会において直面する生活上の問題をとりあげ、あくまで明瞭に自主的に解決していく過程を叙述したこと。
- 二、従って生活上の問題に対する解決を教訓的に、また決定的に述べることを受け、二年生の児童相応に児童自身のうちからものごとの批判的な判断を育てるように留意したこと。
- 三、公共のために働く人たちへの理解と、それに協力する態度を養うように努めたこと。
- 四、都会と農山漁村の生活及びその相互依存の関係は、第二学年で詳述することとし、ここでは、その端緒をつかませるようにしたこと。
- 五、限られた頁数のうち一か年を通しての生活単元をもつことは、かえって問題の所在を不明瞭にすることを恐るるので、季節は春から夏に限定しているが、児童がこの季節において日常生活からいろいろな問題をつかみ、よりよき社会をつくらうとする熱意を起すように、また先生や父兄の指導と相まって、いろいろな学習活動へ発展することができるよう配慮したこと。